

2016年7月23日

第15回諜報研究会

山本武利（NPO 法人インテリジェンス研究所）

①

陸軍中野学校は何を残したのか—中野学校の現代的意義

国際社会とくに極東での緊張感の高まりは、特定秘密保護法や国家安全保障会議、安保関連法を生み、国民のインテリジェンスへの関心を高めている。もともと日本は海洋国家ということがあり、国際的なインテリジェンスへの関心が低く、その経験も浅いといわれる。総力戦といわれたアジア太平洋戦争では、前線の戦士、捕虜として、あるいは銃後の出征者家族、被災者としてあらゆる階層がなんらかのインテリジェンス的経験をした。

とくに見逃されてきたのは、アジア太平洋戦争をはさむ7年間、陸軍中野学校なるインテリジェンス将校訓練・養成機関が存在し、2300名のインテリジェンス専門家、将兵を輩出し、彼らを前線に送り出した経験である。彼らは下士官から少佐まで下級オフィサーの一部を構成していたが、軍隊内では目立つ戦績を出す前に終戦となった。しかし彼らの貴重な経験が戦後真剣に受け止められることはほとんどなく、評価されなかった。現在にいたるまで、「秘密戦学校」、「スパイ学校」と広く話題にされ、関係書が数多く公刊されてきたものの、それらは断片的秘話を組み合わせた読み物風の記述に終始しているため、歴史的事項の成果として継承しにくく、興味本位の域を出なかった。

また卒業生たちは敗戦の責任追及を恐れて、秘密戦士としての守秘義務を守っていた。ようやく1970年代になって生存者が経験を語り始め、彼ら自身によって浩瀚な『陸軍中野学校』が刊行された（中野校友会編、1978年）。とはいえ1,000部のみが関係者に流通しただけのもであったか、活動7年間の実相は把握されていない。最大の原因は終戦時に公文書が徹底して焼却されてきたことに求められた。

すべて処分されていたはずの公文書だが、私は2012年、創立期の全容を示す極秘の公文書を発見した。戦時疎開させたと思われる文書が、防衛省防衛研究所にひそかに残されていたのである。私は一括してその分析を進める一方、公文書のない後半期を関係者の手記、回想、記憶などの資料を幅広く収集して補った。今回、こうした多様な資料の総合的な分析により、陸軍中野学校の歴史的位置を確定し、その実相をあますところなく描き出す予定である。

1、情報軽視の陸軍がなぜ陸軍中野学校を創設したのか。その学校は日本軍のインテリ

ジェンス能力向上に寄与したのか。

2、世界的にも希有な活動をしたにも関わらず、総括されなかった日本最初のインテリジェンス学校一個人の隠密活動から特務機関へのインテリジェンス活動の転換に見る中野学校の位置。

3、ゾルゲ事件の与えた日本軍へのショックと皮肉—防諜研究所として同時期にスタートしながら、中野出身者総数の出した成果を超えるゾルゲグループのスパイ活動に見事にしてやられた史実をインテリジェンス史上でどう捉え直すか。

4、防諜、諜報、謀略、宣伝での駆け足学習が受けた付け焼刃的な教育—前線での厳しいインテリジェンス体験のしっぺ返し。

5、軍内外で異常な秘密性保護への強制、規律—中野学校以外に広がらなかったインテリジェンス認識。秘密保護にこだわって、個々の出身者の独創性を削いだ点への反省

6、現代日本人のインテリジェンス・リテラシーの低さ。インテリジェンス遺産の未継承。

7、新資料で現代の研究の停滞を克服する。同校に1939年末に入学し、約1年間過ごした山本嘉彦（乙1短）の『追憶』（1976年自家版）は在学体験や前線での体験を客観的に把握した回想記として評価が高い。その中にこんなくだりがある（233頁）。

中野学校に関する本が戦後数多く出版されている。その一部を拾ってみると次のようなものがある。

中野学校の謎 川俣雄人著（中野学校校長、四十九年七月歿）

南謀略機関（引用者注・『その名は南謀略機関』 泉谷達郎著（二期丙種学士）

謀略太平洋戦争 日下部一郎著（一期丙種学生）

日本の秘密戦 読売新聞編集部著

中野学校 丸山静雄（新聞記者）

陸軍中野学校 畠山清行（シリーズ物として一巻～五巻）

これらの本は商業ベースに乗せるため、読者にアピールするように面白く書かれていて、半分は真実であるが、半分は誇大されていたり、真実でないものがある。

戦後29年たってフィリピンから帰還した小野田寛郎が卒業生だったこともあり、戦後幾度か陸軍中野学校ブームが起こった。本や映画で語られるその姿は、信頼に足る資料が少ないこともあって、「スパイ学校」としての側面が拡大再生産され、山本嘉彦のいうように虚実交えて面白おかしく語られている。だが、防衛省防衛研究所には、陸軍中野学校の創設プロセスを示す公文書がひそかに残されていた。1939年に、陸軍中野学校の前身にあたる陸軍後方勤務要員養成所所長の秋草俊陸軍大佐が、板垣征四郎陸軍大臣に宛てた

極秘の公文書等を含め数十点が、国立公文書館アジア歴史資料センターに引き継がれていた。そこには設立経過、教育計画、授業科目、満蒙演習旅行の記録、第一期生の卒業生名簿、教官名簿、卒業生の状況といったことが細かに記されている。ただし公文書は昭和16年までである。

②

公文書不足を連合国側資料で補うー

連合国側は陸軍中野学校をどの時点でどの程度気づいたか

I 戦争末期

1、イギリス

ビルマ戦線 光機関リストの作成（全17頁、索引付き）①、②

残置諜者（ビルマ人）の光機関事務所中枢への潜入

光機関のビルマ人スパイ教育機関（ペナン訓練所）③への監視

—— 光機関を担う中野学校出身者はそのスパイに気づかぬ

終戦前後での捕虜の尋問者数も僅少（例外的な中野出身者の貴重な供述④）。日本兵も中野の存在を知らなかった。知っている者の知識も浅く、不正確。

大川塾出身者の捕虜の多さから中野を上回る存在と過大評価

2、オーストリア

ニューギニアなど南方での日本軍との交戦、

ビルマ戦線でのイギリス側情報の提供

アメリカ軍よりも早く中野の存在を知る — 「オーストリア陸軍による日本陸軍インテリジェンス分析」『Intelligence』1号翻訳 「中野学校」と「昭和学校」（⑤）

3、アメリカ

マッカーサーの独善的インテリジェンス活動—SEATIC（⑥）など英軍側からの捕虜供述情報の消化不足

アジアでの OSS 活動の弱さ

4、ソ連など

満州特にハルピンでの長期の関東軍情報部との対峙で日本の特務活動、情報活動の概要を満州内部の範囲で把握していたが、本国での活動を知らなかった。ゾルゲグループも中野の存在に気づかなかった。

延安捕虜情報には中野出身者は見当たらない。

蒋介石側には投降した1例（渡部富美男『千里の道』）があるが、その与えた影響はないと思われる。

II 終戦直後

1、ソ連

終戦直後から徹底的な追跡開始

多数の長期抑留者の強圧的尋問、戦犯追及、

東京裁判での秋草尋問調書⑥、⑦

「偵察将校教育ノ学校」としか把握していない

相互密告による抑留者から中野将校、特務機関員の炙りだし。

機関名、組織図の把握

2、イギリス 占領直後の1945年10月ごろから中野情報の重要性に気付く⑨。

3、アメリカ 1946年後半に気付き、中野情報収集に腰を上げる

関係者への尋問に入るのは1947年に入ってから。その時期には冷戦開始でソ連情報に注意が傾斜。

4、終戦連絡の旧日本軍側責任者有末精三が中野情報を故意にぼかし、尋問活動を遅らせる

III 占領後期

アメリカ

1、おざなりな中野調査、731調査ほどの成果なしと判断か。

2、中野の戦争責任回避、公職追放の不徹底

3、ソ連からの帰還将兵からソ連インテリジェンスの入手に全エネルギーを注ぐ。その際中野出身の抑留者が重宝されたと思われる。

4、ソ連

もっとも中野研究を進めたと推測されるが、その成果は発表されていない。

秋草は1948年モスクワ郊外の監獄病院で死去。彼からインテリジェンス情報を搾り取り、夜間長期尋問で死に追い込む（実質処刑）。

ボブレニョフ・ウラジーミル・アレクサンドロビチ『シベリア抑留秘史—KGBの魔手に捕われて』終戦史料館出版部、1992年参照